多賀大社と糸切餅

土産や謡…巧妙な宣伝手法

「お伊勢参らば　お多賀へ参れ　お伊勢お多賀の子でござる」、「お伊勢七度　熊野へ三度　お多賀さまへは月参り」と親しみを込めて俚謡に謡われる多賀大社、これは「伊勢神宮の天照大御神は、多賀大社の祭神伊邪那岐大神と伊邪那美大神の子供だから、お伊勢参りに合わせてぜひ多賀大社へも」「一生のうちにお伊勢参りは七度、熊野詣では三度、多賀大社へは毎月参りましょう」という意味です。

多賀信仰が室町時代後期以降の急速な広まりの中で謡われたもので、今でいう多賀信仰を広めるためのCMソングといえます。そして、多賀大社に残る書状には、武田信玄、織田信長、浅井長政、豊臣秀吉などのそうそうたる武将の名がみられることからもその信仰の広がりをうかがうことができます。

多くの信者を集めた多賀信仰、なかでも最も大事だったのが多賀大社参詣です。今でも寺社の参拝にはお土産は必須アイテムです。多賀大社参詣の土産として全国的に有名なものに「糸切餅」があります。これは米粉と漉し餡で作られる生菓子で、米粉を棒状のもちに仕上げ、中に漉し餡を入れ、糸で程よい大きさに切ったものです。赤と青色の線がそれぞれ1本・2本入っています。ではどうしてこの糸切餅が生まれたのか。それには諸説がありますが、大きくは次の2つのいわれがあります。

1つは、若狭国（福井県）出身の商人で八日市に住んでいた北国屋市兵衛の子万吉が作ったと伝えるもので、米粉で餅を作り、寿命を延ばすという意味で長く引き伸ばし、ひいきにしていた力士「大海」の化粧まわしとその妻三縞にあやかり2本の青線、1本の赤線の縞模様をつけたといいます。そして、細長い棒状では食べにくいが刃物で切っては寿命を切ることにつながり縁起が悪い、そこで細糸で切れ口を入れて売り出したといわれています。

もう1つは、文永11年（1274）、弘安4年（1281）の蒙古襲来の際に、全国の寺社が戦勝を祈願した中、当然多賀大社も行いました。

多賀大社前の土産物店

その際に、神社では敵の旗印を作り、それを断ち切り埋めることで祈願したといいます。これにあやかり、もちに青2本、赤1本の三筋を彩り、敵の旗印に見立て、餅を弓づるで切ったことがはじまりという説です。ともに長寿や戦勝といった多賀大社の霊験にあやかったという意味では同じです。実はこの糸切り餅、米粉を材料として使っているため、保存技術が進んだ現在においても、賞味期限が1～2日と日持ちがしません。つまり、それは多賀大社に参拝しなければ手に入れることができないご当地ものです。

最初にあげた多賀参詣をPRする謡、多賀大社の霊験にあやかったお土産、多賀大社を信仰の面からだけではなく、観光地的な視点からみれば実にうまくできた仕組みだと感心させられます。テレビや新聞、ましてやインターネットなどない時代にあって編み出された、今に通ずる宣伝手法。人の考えることは、やはり時代を異にしても一緒ですね。

（財団法人滋賀県文化財保護協会　堀　真人）